



草加八潮地域連携呼吸器研究会 (SYRC-R:シルク・アール)

事務局：草加八潮医師会

〒340-0018 草加市中央1-5-22
TEL 048-928-8760
FAX 048-924-7180

- 代表世話人・会計：高木 寛
(高木クリニック)
- 世話人：加藤 貴紀
(かとうファミリークリニック)
- 平田 大介
(草加八潮医師会学術担当理事・平田クリニック)
- 篠原 浩一
(八潮中央総合病院)
- 広報・編集：新 謙一
(草加内科呼吸ケアクリニック・前東京医科歯科大学臨床教授)
- 看護・介護部門世話人
花木 美穂子
(わーくわっく草加)
- 須嶋 義夫
(一正堂薬局第二支店)
- 神津 陽子
(訪問看護ステーションゆりの木)
- 高橋 克幸
(獨協医科大学越谷病院リハビリテーション部)
- 新 智美
(草加内科呼吸ケアクリニック)
- 監査：斉藤 清
(草加八潮医師会)
- 会報著作・製作：新 謙一

SYRC-Rは草加八潮の周辺地域からのご参加も歓迎致します

神津陽子さん（訪問看護ステーションゆりの木）に当会の部門世話人になっていただきました。



ケアステーションかしの木の内田由美子氏の異動に伴い、訪問看護ステーションゆりの木の管理者である神津さんに部門世話人になっていただきました。訪問診療を積極的に行っているメディクス草加クリニックの高橋先生とタッグを組んで24時間の訪問看護ステーションを切り盛りし、自院以外の実地医家や病院との連携にも積極的で、患者さんからの信頼も厚い看護師です。皆様、宜しくお願いします。

編集後記：カンブリア宮殿の放送の中で亀田信介先生が固定概念に囚われないサービスの追求の重要性和、医療は社会インフラであり地域の文化であると述べていました。遠くの患者さん呼び込むようなマーケティングは全く考えずに、同じ事を繰り返すことなく前例に拘らずに地域の要求に答えていく事で結果的に今の亀田メディカルセンターと周辺事業が構築されていたそうです。事業所としての医療の質はコアである医療技術で多くが決まりますが、地域医療システムとなると構成されるサービス全体のハーモニーが問われてきます。亀田先生は医療システムが料理で言えばダシとして地域価値を決める一つの大きな要素になるとおっしゃってました。私達はまだまだ地域医療のハーモニーの質を高める余地が多々あります。向上する心を失わず仕事をする事で患者さんの期待を超えたサービスが実現できれば感謝も頂けますし、能力が向上する事で自己実現もできる私達は、実際に貰っている金銭を超えた報酬が得られる「ある意味恵まれた職場環境」とも言えます。地域インフラである医療の質が個人個人の質で決まるのであれば、内部顧客の我々スタッフが生き生きと自己実現の為に働ける環境が大切なのでしょう（謙）。

シルク・アール：質の高い滑らかな地域連携に！

草加八潮地域連携呼吸器研究会（英名：Soka-Yashio Regional Conference of Respiratory Disease）は頭文字をとりSYRC-Rと表記し、「シルク・アール」と発音します。絹（シルク）の様に質の高い滑らかな連携がある（アール）ことを目指しての語呂合わせのネーミングです。名前負けしないように継続発展させていきたいと考えています。皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。



専門職連携セミナーのご案内
IPE/IPW基礎講座を未受講の方を対象に多職種連携のコツをお教えます。（当会の新智美も講師で参加します）
開催日：11月18日(日)
時間：9：30～17：00
場所：埼玉県立大学
参加費：無料
定員：20名
お問い合わせ：埼玉県立大学地域産学連携センター Tel 048-971-0500
お申込み：秀和総合病院 相談支援センター 竹野まで
FAX 048-737-6326（申込み）

草加八潮地域連携呼吸器研究会（SYRC-R）

お互いの顔が見える地域連携に

ハイライト：

日本の死亡原因の第3位が脳血管疾患を抜いて肺炎になったと先頃報道されました。前回、東日本大震災で中核医療機能を全うし全国から注目された石巻赤十字病院の方々より生々しい実態を拝聴しましたが、首都圏は過去に誰も経験したことがないような未曾有のスピードで超高齢化社会と多死社会を迎えようとしています。災害と比べればゆっくりですが確実に来る社会的問題に対して、全体最適を考えていくことは重要です。できない理由をみつけることは容易ですが、問題を共有できる仲間を増やし、先事例を参考にし仲間同士で解決の糸口を探ることが求められています。

目次：

- 次回11/28の第12回SYRC-Rは多職種での情報共有の提案 p1
- 講演1：介護職による痰の吸引等の精度の理解 日本在宅看護学会副理事長 佐野けさ美先生 p2
- 講演2：医療・介護関連肺炎 亀田メディカルセンター呼吸器内科主任部長 青島 正大先生 p2
- パネルディスカッション 「介護老人の肺炎予防でできること・難しいこと」 p3
- 第52回日本呼吸器学会 昨年のアンケートを発表 p3
- 11/18に埼玉県立大で専門職連携セミナー（基礎編）を開催 p4

患者さんを中心に多職種間の情報共有を皆さんと考えたい：サイボウズLiveの活用

患者さんを取り巻くサポーターは家族のみならず、医療・介護スタッフ、或いは行政と多岐にわたります。しかし1対1の情報伝達だけでは情報共有に膨大な手間がかかり、担当者会議を開くにしても、各患者さんに関して全員が定期的に来るのには至難の業です。しかし、携帯メールが誰でもできるようになった今、患者さん毎に最大20名まで無料で情報を共有できるシステムがあります。それが「**サイボウズLive**」です。例えば、在宅酸素療法中のCOPD患者の汁九有（しるく ある）氏は老いた妻と団地の3Fに暮らし、松原医院がかかりつけでした。しかし急性増悪を繰り返し連携病院へその都度入院して逆紹介され、階段昇降に非常に支障をきたしています。この度、在宅リハを谷塚氏に、訪問看護を高砂氏に、訪問薬剤指導を花栗氏に頼み、妻のレスパイト目的でデイサービス安行も組み込み、急性増悪の予防と早期介入を図りました。ケアマネ（CM）の八潮さんは退院前カンファレンスに各サービス担当者と東京に住む一人娘を1度は一堂に集めることができたが、諸般の事情で娘との同居も施設入所もできない患者さんが急性増悪で更に入院してADLを低下させることは生活の破たんにつながりかねず、安易に入院させる訳にはいかないと危惧しています。そのような場合、CMの八潮氏・主治医の松原氏・リハの谷塚氏・訪看の花栗氏・薬剤師の高砂氏・デイサービス安行と必要に応じて一人娘や連携病院連携室がクラウド上で情報共有できる仕組みがあれば僅かな異変に気付いたスタッフが次々に情報を共有して介入するだけでなく介護を統括するCMと医療を統括する主治医がリアルタイムで情報共有ができます。患者さんが入院したり亡くなった場合でも当日中に情報が全員で共有できない現状は好ましいサービスレベルではありません。「予防は治療に勝る」と唱えたのは地域医療の偉大な先達、佐久総合病院の故、若月俊一先生でしたが、当時は膨大な時間をかけて地域医療を構築しました。今は携帯電話やPCで情報がリアルタイムに共有できて、必要があれば車で訪問して在宅でも軽い入院診療並みの医療行為は日常茶飯で行われています。

次回第12回 SYRC-Rでは、この仕組みを詳しくご説明する予定です。**11月28日(水)**の夜は皆様のご参加をお待ちしています。



Eメールで情報共有は、不便ではありませんか？
無料のサイボウズLiveでチームの情報共有をスムーズに。
FacebookやTwitterのアカウントですぐにスタートできます。
Facebookで利用開始する Twitterで利用開始する



特集：医療・介護関連肺炎

特別講演1：介護職による痰の吸引等の制度の理解

～医療と介護が協働する時が来た～

日本在宅看護学会 副理事長 佐野 けさ美 先生

特別講演2：医療・介護関連肺炎

亀田メディカルセンター 亀田総合病院

呼吸器内科主任部長 青島 正大 先生



医療崩壊に立ち向かう亀田にヘッドハンティングされた青島先生からのメッセージ

青島先生は1984年旭川医科大学を卒業後、虎の門病院レジデントを皮切りに聖路加国際病院、東京医大講師、杏林大学助教授、狭山病院副院長を経て2011年亀田総合病院呼吸器内科主任部長に赴任されました。感染症に造詣が深くチーム医療でも実績が豊富な先生です。医師だけでなくメディカル・ケアスタッフにもわかりやすく医療・介護関連肺炎のガイドラインと高齢者の管理上の注意点を解説していただきます。



在宅医療の質向上に喀痰吸引の質の向上は欠かせない

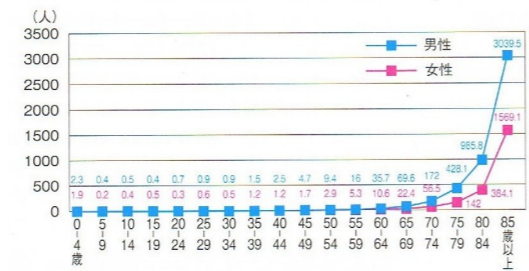
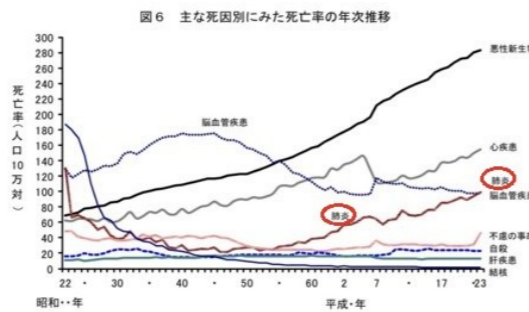
高齢者の喀痰マネージメントは重要です。特に家族の介護に限界がある在宅において、その実際のケアを専門知識と患者アセスメントで仕切るのは看護師の重要な役割です。看護師の情報からケアマネは介護プランに反映させてサービスを決定しますが、喀痰吸引が家族と看護師以外には限定的にしか認められていないため往々にして両者の負担が高まり、特に関心が高齢者のケアを誰が担うのかは深刻な課題です。立ち遅れている在宅での医療の質の改善に取り組むべく実践者の立場で学問する為に設立された日本在宅看護学会の佐野先生から喀痰吸引についてお話を頂きます。

肺炎が遂に死因の第3位に、日本呼吸器学会が医療・介護関連肺炎診療ガイドラインを発表

肺炎で死亡する方が高齢化を反映して増加し、脳血管疾患を抜いて死因の第3位になったと先日報道されました。肺炎で亡くなる方の殆どが高齢者で日常で何らかの介護を要する状況です。学会では今年高齢者を念頭に置いた医療・介護関連肺炎の診療ガイドラインを発表しました。

高齢者の管理の質を維持することは患者さんの日常生活を生きがいのあるものにして、家族やケアスタッフの負担軽減にもなります。

今回は肺炎予防を通して地域の課題を探り、みんなで「今からでもできることは何か」を考えたいと思います。



年齢別・性別肺炎死亡率（10万人対）平成17年度人口動態統計

外部顧客(患者)さんだけでなく内部顧客(職員)を満足させる 亀田メディカルセンター亀田院長が6/14カンブリア宮殿に出演

Always Say YES!

一人でも多くの患者さまに笑顔でお帰りいただけるように。



6月14日の放映で「田舎だから」を言い訳にしない経営者としての信念を語っていました

埼玉県も千葉の房総地域も国際的には「Greater Tokyo」の定義でくられます。この世界最大の大都市圏東京1都3県が人類史上最速のスピードで高齢化を迎え圧倒的な医療供給不足に陥る（オーバーシュートと言います）と強烈な危機感を露わにしています。

その中で最高の医療を普通の住民に提供する信念を語り、患者さん毎に答えが違う多様性の中で「Always Say Yes」を掲げて医療者

として固定概念に囚われない個々の柔軟な発想を促しています。

また、経営者としてチームプレーを重視し、職員には自己実現の場を提供して内部顧客である職員を満足させることが外部顧客である患者満足を獲得する道と説いています。

私たち医療介護事業者は、あまねく今後の医療オーバーシュートに対応する貴重な医療資源です。亀田に見習うべき事は多いです。



パネルディスカッション ～介護老人の肺炎予防でできること・難しいこと～

80歳以上の主要死因である肺炎は要介護老人の管理の質が発症に大きく関わってきます。市内の老人保健施設や特別養護老人ホームで伺った事例を新智美氏が紹介し、現状の理解と今後の課題を考えます。そして、私達も「Always Say YES!」を言うために自分たち個人個人が今からできることを職場で話し合ってみましょう。

パネラーは、講演の青島正大先生、佐野けさ美先生、SYRC-Rから訪問看護師神津陽子氏、看護師の新智美氏。司会は開業医の新謙一が担当します。



<http://www.tv-tokyo.co.jp/cambria/dogatch.html> で放映番組を動画で配信しています **特に事業管理者は必見です**

第52回日本呼吸器学会 in 神戸(2012年4月)

昨年実施した在宅ケアに関するケアマネへのアンケート結果を発表

本学会は、日本の呼吸器医療の総本山です。昨年の第9回 SYRC-R で聖路加国際病院の緩和ケア科医長林先生をお招きした際に、私達が話題提供の為に実施した在宅呼吸器管理および終末期に対するケアマネへのアンケートの結果を草加内科呼吸ケアクリニックの新智美氏が発表しました。

ケアマネは在宅呼吸器や終末期の経験の有りが比較的に明瞭に別れている状況がありました。また、良き相談相手となるであ

う訪問看護師をサービスに組み入れる際の躊躇も垣間見えました。

当会は参加する全ての職種が地域の実情を把握し、それぞれのスタッフが「今、自分ができることは何か」を考えていただくヒントを提示することを心掛けています。今後、地域が急速に高齢化し、入院病床が増えない状況の中で、ケアマネが在宅療養を構築する際に対応困難例が積み残されない様に、全体で気配りする必要がありそうです。

